



若者へのメッセージ 28

TVキャスター 草野 仁

【第三回】物事の本質に迫る

報道に携わる者はどのような出来事に対しても、物事の本質に迫り、問題の核心に肉薄しなければならぬ。

何時もチャレンジ精神で

平成6年（1994年）6月下旬、長野県松本市で毒ガスのサリンが散布され、8人が亡くなり、凡そ600人の人達が重軽傷を負うという前代未聞の事件が起きた。当時日本テレビ午後2時からの「ザ・ワイド」という情報番組の司会を担当していた私は早速取材の指示を出し、他のテレビ局の報道番組も徹底してモニターして犯人像に迫ろうとしたが、長野県警の捜査は一向に容疑者を絞り切れず大苦戦。他局の人気

報道番組のサリンについての解説を聞いていても全く釈然としない思っていた。それもそのはずで、サリンという毒ガス兵器は通常戦場でも使用を禁止されているものであり、それこそ兵器の専門家でなければ実像を掴むことなどほぼ不可能。ところがテレビで解説をしている学者の方々は化学式ではサリンなるものを知っているが、実際に見たことも製造したことも無いので、いくら解説に耳を傾けても隔靴搔痒の思いが消えないのだ。であるならばこれは毒ガス兵器の専門家を招いて徹底調査をお願いするしかない、アメリカ

カの共和党系シンクタンクにいたカイル・オルソン氏を捜し当て、松本サリン事件を調査して貰った。1週間余りが経過し、わが番組のスタジオに登場したオルソン氏は「松本でサリン事件が起きたのはテロリストグループがテスト地としてあの場所を選んだからです。テストを行ったという事は次に必ず本番があります。場所は勿論東京です。狙われるポイントは地下鉄、新幹線、ドーム式野球場、等の閉鎖空間です。次に必ず本番がありますので日々も注意してください」という大変ショッキングな内容の報告をしてくれた。

そして彼の松本サリンレポートがアメリカ政府にも報告され、翌年（1995年）の3月19日付英国の「サンデータイムズ」紙に「いずれ東京で本番が！」というショッキングな記事が掲載され、まさにその翌日、東京で地下鉄サリン事件勃発というニュースが全世界に伝えられた。余りのタイミングの良さに予言者の様なカイル・オルソンとは一体何者なのか、と世界中が驚いた。勿論再びオルソン氏に緊急来日して貰い、地下鉄サリン事件を徹底調査して貰いました。オルソン氏は「地下鉄サリン事件で使われたサリンは純度60%程度で武器としては不良品といえる物でした。仮にもっと純度の高い物であった

色紙
プレゼント
のお知らせ

■草野 仁様ご揮毫の色紙を1名様にプレゼントいたします。はがきに、「草野 仁様の色紙希望」と明記のうえ、「若者へのメッセージ」に対するご意見・ご感想を添えて、編集部宛にお申込みください。締め切りは3月29日（金）です。ふるってご応募ください。なお、色紙の発送をもって発表にかえさせていただきます。

「何時も チャレンジ精神で」

何時も
チャレンジ精神で



ら実際よりもはるかに甚大な被害を引き起こしていたはず。また、サリンは純度の低い粗悪品程、加水分解を起こして早く劣化するものなので、オウムが1カ月位前にサリンを作っていたとすればこの後、再度サリン攻撃を行っても効力は殆ど無くなっているだろう」と専門家でもなければ出来ない詳細なレポートを番組の中で提供して、放送を通じてオウムに打撃を与えた。

私たちの番組だけが群を抜いてサリンについて詳細を伝え、放送を通じてオウムの凶悪な試みを伝え続けたので、日中の番組にもかかわらず圧倒的な視聴者の支持を獲得できた。そしてその分、真実を伝える「ザ・ワイド」は自分達の敵とばかりに脅迫電話が頻繁にかかって来ることにもなった。「草野仁は放送で嘘ばかり言っているので家族共々、サリンで殺す」そんな内容の電話が何度もだ。

警視庁の知人達からの勧めで家族共々あるホテルに2カ月半避難し、外出時は防刃防弾チョッキを着用する等、緊張感に満ちた日々であった。やはり情報番組の務めは物事の本質に迫ること、そして問題の核心に肉薄することなのである。サリン事件から25年が過ぎ、自分自身も情報番組を離れて10年余りが経ったが、当時の信念は今も変わらず私の心の中にある。